

## 分場拾遺Ⅺ 静岡初の缶詰製造とヘルメット潜水の導入

平成 23 年 4 月 24 日、清水フェルケール博物館を訪れる。伊東祐方氏の日記を預けるに値する博物館かどうか見極めるためであった\*が、それはさておき……

フェルケール博物館に併設する形で、缶詰記念館が敷地の片隅にある。記念館の建物自体は、わが国で初めてまぐろ油漬缶詰を製造した清水食品の本社社屋だそうだ（そして、まぐろ油漬缶詰を開発したのは、静岡水試の村上芳雄氏であり、氏は後に請われて清水食品に勤務したあと、第 4 代社長となっている。）。

この記念館に日本と静岡県の缶詰史が掲げてある（写真）。それを見比べていたら、下田に居住する者にとって「おおっ」と思うようなことが載っていた。

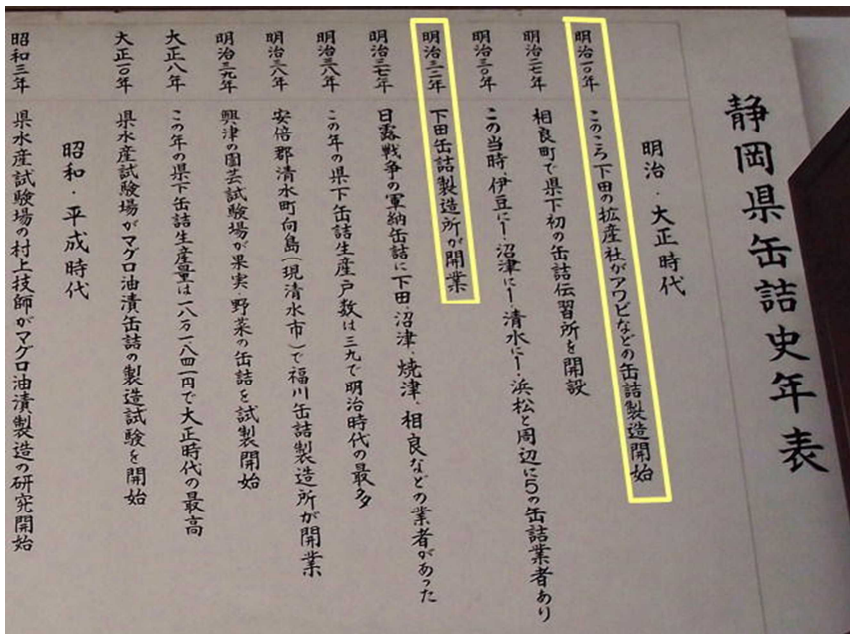


写真 フェルケール博物館缶詰記念館に掲示されていた静岡県缶詰史年表

\* 当時、筆者は静岡県水産技術研究所本所（焼津市）に単身赴任で勤務していた。伊東祐方氏の日記とは本所広報誌「碧水」139号（平成24年7月）「温故知新一古き“いわし”研究を訪ねる I 真鱈漁況調査員 伊東祐方氏」の原資料のこと。

静岡県で最初に缶詰を製造したのは、明治10年頃で下田の拓産社がアワビなどの缶詰製造を開始したと載っている(写真)。焼津でも、沼津でも、清水でもなく、伊豆半島の先端の下田だそう。では、明治10年は日本の缶詰史でどのような位置を占めるのか？

日本で缶詰の始祖といわれる松岡雅典氏が長崎で缶詰を試作したのが明治4年、明治8年に明治政府はアメリカから缶詰機械を導入し、新宿試験場で缶詰試作を始めた。そして、下田で缶詰製造が始まったとされる明治10年は、西南戦争で初めて軍に缶詰が納入され、北海道で開拓者が官営石狩工場を建設し、さげます缶詰を製造した年である。缶詰の黎明期にあたるのは確実だろう。そんな時に、下田拓産社は、どのような人々によって組織され、どのようにして缶詰製造技術を身に付け、製造機械を調達し、どのような考えでアワビ缶詰製造を目論んだのか？

以下に記すのは、それらの疑問：謎に対し核心に迫るべく、調査した結果である。残念ながら謎の多くは明らかにならなかったが、これ以上の情報は集まりそうもないので、ここまで調べた内容を記しておく。

## 缶詰記念館の元資料は？

フェルケール博物館缶詰記念館の元資料はなにか？静岡県史や下田市史、明治25年の県内の漁業状況を記録した静岡県水産誌、伊豆の郷土資料である南豆風土記や伊豆大辞典には拓産社に関する記述はなかった。そこで、職場の図書室に陳列してある静岡県缶詰史3部作が怪しいと睨み、読んでみた。

続・静岡県缶詰史には、拓産社は載ってはいない！が、謎が解決されたわけではなかった。

「先覚者達の挑戦 県下初(?)の拓産社」と題して次のような記述があった。“茨城県大津の鉄庄重が伊豆下田の拓産社という缶詰企業を訪ねてアワビ缶詰の製法伝授を求めた。明治15年2月、東海道線開通以前のことで、足と船の長旅の末、やっと下田にたどり着き、教を請うと拓産社の社員は「およしなさい、損をしますよ」と次のように説明した。「私どもは合資で拓産社を起こし、県勸業課から900円借り、色々製造したが販路は開けず、また、製法も不完全で製品の1割ぐらいは腐敗してついには失敗した。」”

缶詰史には書いてないが、拓産社を起こしたのが明治10年ということなのか。失敗したという結果は残念だが、元文献(缶詰時報 昭和36年2月号)を探し出せれば、もっと詳しいことが判るかもしれない。

## ちょっと寄り道

写真の静岡県缶詰史年表にはもう1件、下田の記事が載っている。“明治32年 下田缶詰製造所が開業”がそれである。これについてはいろいろと情報が集まった。

加田萬蔵氏の聞き取り、静岡県缶詰史の実質執筆者の真杉高之氏による小木曾四郎氏の奥方ミヨシさんの聞き取り、さらに静岡県缶詰史から、下田缶詰製造所についてまとめると、次の通りとなる。

「下田缶詰製造所は明治32年に東京から下田に移り住んだ飯田耕作、小木曾四郎両氏が始め、昭和3年まで操業した。明治32年の春、東京で缶詰製造していた飯田、小木曾両氏が、下田の水産物を缶詰にしようと下田に移り住んできた。波止場に近い藤佐という汽船扱所の物置を借り「下田缶詰製造所」の看板を出した。時は日露戦争間近、軍への御用を取り付け、もっと広い場所で清潔な工場を目指し、まもなく大工町で百坪の土地を入手。新時代の缶詰製造設備を備えた大工場は、学童はじめ近隣町村から見学者が殺到、従業員は百名に近かった。明治43年にはロンドンで開催の日英博覧会に缶詰を出品し、銀賞を得ている。飯田氏は明治44～45年にメキシコ漁業調査会に農商務省の委嘱で参加し下田を去ったが、その後は小木曾氏が昭和3年まで経営にあたった。日露戦争の軍用が終わると、満州へ缶詰を出荷したが、焦げ付きを出し、この代金回収の不能が直接の原因となって工場を手放した。その後、中木でサザエ缶詰小工場をみかん缶詰と組み合わせて経営し、相当の収益があった。その儲けで現在の小木曾商店の土地を入手、鯉節製造に転向した。」

静岡県缶詰史では下田缶詰製造所を明治時代の静岡県の缶詰業としては最大規模と評価している。現在の小木曾商店は干物の製造販売を主な業としており、創業当時の「下田缶詰製造所」の看板や日英博覧会で得た銀賞の褒賞状は本店店内に飾られており、見ることができる。

### 閑話休題—核心に迫る

拓産社については、やはり元文献を読むしかないと分かった。国立国会図書館に行かなくてもコピーをお願いできるそうだ。便利な世の中となった。

届いた資料は缶詰だけの話でなかった。明治初年代の交通事情や風習に関する貴重な記載のほか、当場の業務であるアワビ漁業に関することも記載されていた。

先の静岡県缶詰史の記述に加えるべきこととして以下の項目があった。

#### 1. なぜ、茨城県大津の鉄庄重氏が拓産社のことを知ったのか？

明治15年1月に大津から潜水夫として伊豆の出稼ぎしていた逸見彦之介氏から鉄氏に「下田の拓産社はアワビや魚を生のまま缶詰に詰め、何年経っても変わることのない缶詰というものを製造している」という手紙をもらい、鉄氏はその方法を会得したいと考えた。

#### 2. 逸見彦之介氏の伊豆出稼ぎの目的は？

逸見氏は拓産社に潜水技術を買われ、ヘルメット潜水でアワビを漁獲していた。

#### 3. 鉄氏はどのように拓産社と交渉したのか？

鉄氏は拓産社の缶詰製法は秘法であり、簡単には教えてもらえないだろうと考え、次のように交渉した。“島に逸見氏を渡して潜水させるために逸見氏の雇用を1年延長したい拓産社に対して、缶詰の製法を教えてくださいなれば、逸見氏の1年延長は認めない。”こう切り出した鉄氏に対して、拓産社社員は“教えるのは簡単なことだが、あなたはそれを知り儲けるつもりなのか、それとも損を覚悟のうえか”と話し、鉄氏が“せっかくここまで来たのだから、なるべく儲けたい”とやり取りした。

4. 拓産社は原料アワビをどこから入手したか？

湊<sup>2</sup>から3里（約12km）程離れた地<sup>3</sup>から、婦人が6貫目（22.5kg）のアワビを頭上に載せ運搬した（にわかには信じられないが・・・）。この記載によって、明治15年に下田・南伊豆地区で頭上運搬の風習があったことがわかる。

5. 鉄氏は缶詰製法を学ぶことができたのか？

鉄氏は弁当持参で7日間拓産社に通い、製法を習得した。その後、試作品とともに下田から石船に乗り、東京経由で茨城大津に帰った。

6. 鉄氏は茨城大津で缶詰を作ったか？

大津に帰り着いた鉄氏の元に缶詰製造を経営したいという人々が多く訪れたが、鉄氏は拓産社との問答（儲けるつもりか、損を覚悟か）を繰り返し問いただし、最終的に5人で「興業社」をおこし、缶詰製造を始めた。しかし、製品は思ったように売れず、鉄氏は健康の関係から半年で引退し、「畢竟之予定の失敗なり」と書いている。その後、興業社は創業5人のうちの鉄伝七氏が引き継ぎ、軌道に乗せることができた。

7. 船出を知らせるアワビ

鉄氏は下田に行く際、箱根湯本福住で一泊した。宿で相部屋となった伊豆の人から、三島神社の鳥居前にアワビがあれば、押送り船が沼津から伊豆に出ることを知らされる。下田に行くには天城越えの難儀を覚悟していたが、押送り船に便乗できれば楽になる。そこで、伊豆の人と箱根を超え、三島神社にたどり着くと、果たして鳥居前にはアワビがあり、沼津から押送り船に乗ることができ、南伊豆小稲に無事着くことができた。

---

<sup>1</sup> 「島」がどこを指すかは、述べられていない。「伊豆諸島」あるいは「神子元島」の可能性が考えられる。

<sup>2</sup> この「湊」がどこを指すのかも、述べられていない。「下田」あるいは南伊豆の「湊」の可能性が考えられる。逸見氏の伊豆での居住地は南伊豆小稲であったので、南伊豆「湊」の可能性が高いのかもしれない。

<sup>3</sup> 3里程離れた地がどこを指すのかも、述べられていない。

残念ながら、先に示した謎「拡産社を組織した人々、缶詰製造技術の習得法、製造機械の調達法」は解明されなかった。唯一、アワビ缶詰を目論んだ考えについては、それまでの素潜り採捕に比べて漁獲能率の向上したヘルメット潜水で漁獲された大量のアワビを商品化するためと想像できた。そして、拡産社が缶詰製造を始めたのが明治10年頃であるとはどこにも書かれていなかった。私は次項の理由から“明治10年頃”はフェルケール博物館担当者の早とちりではないかと考えている。

### 我が国へのヘルメット潜水の導入

明治維新になり、西洋から多くの学問、芸術、技術が我が国に入ってきた。ヘルメット潜水もその一つである。ヘルメット潜水の我が国への導入については、吉原友吉氏を取りまとめ、後に元千葉県職員の大場俊雄氏が詳細に報告している。下田市田牛地区でのヘルメット潜水導入年については、両者とも同一の資料を参照しているが、吉原氏は明治16年、大場氏は明治15年としており、どうして違いが生じたのかはわからない。本稿ではより詳しい大場氏の報告に鉄氏の拡産社に関する記述を加え、ヘルメット潜水導入に関わる年表を作った。

表 明治時代におけるヘルメット潜水の導入（大場 1993、鉄 1961 から作成）

明治	茨城	房総	伊豆	御前崎	三重
11		増田万吉、 潜水器採鮑			
12	増田万吉、 潜水器採鮑				
13			田崎忠篤他、 潜水器漁業出願		伊豆から潜水夫雇い、 潜水器採鮑
14			逸見彦之介、潜水 夫として出稼ぎ		
15			田牛で潜水器でア ワビ漁獲 鉄庄重、拡産社訪 ねる	潜水器でア ワビ漁獲	

明治13年の伊豆での田崎氏他の潜水器漁業出願、三重で伊豆から潜水夫を雇い採鮑試験を行った件から判断する限り、伊豆でのヘルメット潜水の導入は明治13年ではないだろうか（大場氏もそう推定している）。先に想像したように「拡産社はヘルメット潜水で漁獲された大量のアワビを商品化するために缶詰にした」のなら、缶詰製造を始めたのは明治13年あるいは14年になるはずである。そして、下田市田牛地区でのヘルメット潜水導入年について大場氏の明治15年説を信じると、

<sup>4</sup> 田牛漁業組合 水産物統計臺帳（鮑之部）・沿革誌

田牛でのヘルメット潜水と拓産社との結びつきが想定できる。

## 付録

・ 缶詰史には「拓産社は県勸業課から 900 円借りた」とあるが、鉄氏は「勸業課から 900 円借りた」とだけ記している。勸業課は県の組織かどうかは不明ではないだろうか。県の組織だと想定して、静岡県立中央図書館歴史文化情報センターで明治時代の公文書を探してもらったが、該当の文書（例えば、申請書や借用書）は見つからなかった。

・ 増田万吉氏は我が国におけるヘルメット潜水の漁業利用に関する重要人物であるが、鉄氏の記述にも登場する。鉄氏の伊豆への旅装は「明治 12 年頃、増田万吉が潜水夫として大津に初めて来たときに着用していた服装で、大津では大流行した」と記されている。

## 文献

静岡県缶詰史編集委員会（1975）静岡県缶詰史。

静岡県缶詰史編集委員会（1988）続・静岡県缶詰史。

下田史談会編（1967）加田萬蔵氏に聞く 下田港をめぐる南伊豆漁業の変遷-明治百年史料-②、伊豆下田。

真杉高之（1975）静岡の明治の缶詰業（上）、缶詰時報、54（11）。

鉄 庄重（1961）常陸国鮑缶詰業の沿革、缶詰時報、40（2）。

吉原友吉（1971）アワビの漁獲統計、東京水産大学論集、6。

大場俊雄（1993）房総の潜水機漁業史、崙書房。

（長谷川雅俊）